平成20年度
出雲市文化財調査報告書

中村横穴墓群

堂ノ原城跡

神戸川堤防跡

2009年3月

出雲市教育委員会

平成20年度

出雲市文化財調査報告書

中村横穴墓群

堂ノ原城跡

神戸川堤防跡

2009年3月

出雲市教育委員会

序

出雲北東部には多くの古墳・横穴墓が点在していることが知られていますが、そのほとんどが未調査であり、この地域の古墳時代の様相が不明でありました。しかし平成18年(2006)、中村1号墳と時を同じくして、中村横穴墓群の発掘調査も実施することとなりました。これらの調査は出雲北東部の古墳時代を考える上で貴重な成果をもたらしました。

さらに城郭の調査、河川の堤防跡の調査成果を掲載いたしました。

こうした調査成果が、この地域の歴史を解明していく上で貴重な資料となり、埋蔵文化財への理解や歴史学習の助けとなれば幸いです。

最後になりましたが、本書の作成にあたり、地元の方々や関係各方面の方々に対し心からお礼申しあげます。

平成21年3月

出雲市教育委員会

教育長　黒　目　俊　策

例　言

1．本書は平成18年度、20年度に出雲市教育委員会が実施した、中村横穴墓群、堂ノ原城跡、神戸川堤防跡の調査報告書である。

2．調査期間は下記の体制・期間で実施した。

中村横穴墓群

調査地　出雲市国富町

調査期間　平成18年（2006）４月４日～平成18年（2006）４月18日

調査体制

事務局　石飛幸治（出雲市文化観光部文化財課長）
花谷　浩（同　学芸調整官）
川上　稔（同　主査）

調査員　坂本豊治（同　埋蔵文化財係主事）

調査補助員　高橋亜紀（同　臨時職員）
山口智子（同　臨時職員）

整理作業員　永田節子

発掘作業員　渡部政義　稲村玉枝

調査指導　原田敏照（島根県埋蔵文化財調査センター）

堂ノ原城跡

調査地　出雲市河下町

調査期間　平成18年（2006）４月26日～平成18年（2006）５月26日

調査体制

事務局　石飛幸治（出雲市文化観光部文化財課長）
花谷　浩（同　学芸調整官）
川上　稔（同　主査）

調査員　景山真二（同　埋蔵文化財係主任）

調査補助員　櫻井康行（同　臨時職員）

発掘作業員　水節義　高橋賢一　安食浩好　中村力男　土江久夫　大輝正人

調査指導　勝部智明（島根県教育庁文化財課）

神戸川堤防跡

調査地　出雲市所原町

調査期間　平成20年（2008）10月29日～平成20年（2008）10月30日

調査体制

事務局　花谷　浩（出雲市文化企画部次長兼学芸調整官）

石飛幸治（　　同　文化財課長）

景山真二（　　同　　埋蔵文化財係長）

調査員　曽田辰雄（　　同　　埋蔵文化財係主事）

調査補助員　勝部真紀（　　同　　臨時職員）

藤田大輔（　　同　　臨時職員）

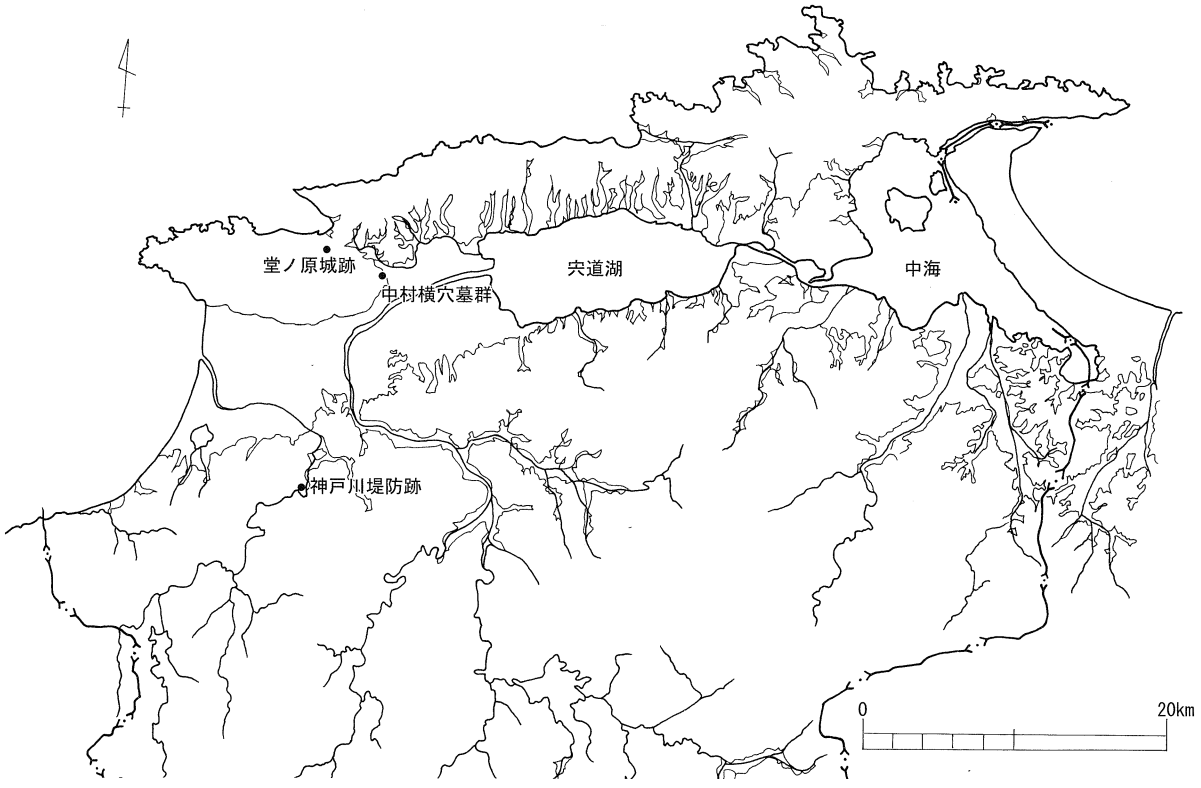
3．本書の執筆は、中村横穴墓群を坂本が、堂ノ原城跡を景山が、神戸川堤防跡を曽田が行い、編集は花谷の指導のもと坂本が行った。

第１章では、鳥取大学医学部井上貴央先生に人骨について執筆していただいた。また、報告書執筆中には、西尾克己氏、守岡正司氏にご指導いただいた。

第３章では、現地調査において株式会社別所組のご協力を頂いた。

4．本書で用いたＸＹ座標は日本測地系、レベル高は海抜高を示す。

5．本報告書掲載の遺物及び実測図、写真は出雲市教育委員会が保管している。



掲載遺跡の位置（S=1/500,000）

目　次

第１章　中村横穴墓群の調査（坂本）……1
第２章　堂ノ原城跡の調査（景山）……11
第３章　神戸川堤防跡の調査（曽田）……15

挿図目次

図１　中村横穴墓群と周辺の遺跡……2
図２　中村横穴墓群周辺地形図……3
図３　中村横穴墓群平面図……3
図４　中村横穴墓群立面図……3
図５　中村５号横穴墓実測図……5
図６　中村５号横穴墓遺物出土状況……6
図７　中村５号横穴墓出土遺物実測図……6
図８　中村１号横穴墓実測図……10
図９　十六島湾周辺の遺跡……11
図10　堂ノ原城跡調査区位置図……12
図11　堂ノ原城跡縄張図……13
図12　堂ノ原城跡遺構平面図……13
図13　神戸川堤防跡位置図……15
図14　堤防跡の位置と周辺地形図……15
図15　堤防跡位置図……16
図16　堤防跡（北東から）……16
図17　堤防跡模式図……16
図18　堤防跡実測図……16

図　版

図版１　中村横穴墓群全景（南東から）
中村５号横穴墓玄室完掘状況
図版２　中村５号横穴墓閉塞状況
中村４号横穴墓閉塞状況
図版３　中村５号横穴墓前庭部完掘状況
中村５号横穴墓玄室流土堆積状況
中村５号横穴墓玄門調査状況
中村５号横穴墓棺台１
中村５号横穴墓玄室内須恵器出土状況１
図版４　中村５号横穴墓玄室内須恵器出土状況２
中村５号横穴墓右側玄門（玄室内から）
中村５号横穴墓玄室内人骨出土状況
中村５号横穴墓玄門（玄室内から）
中村５号横穴墓出土遺物
図版５　堂ノ原城跡遠景（北から）
堂ノ原城跡調査区全景（東から）
図版６　堂ノ原城跡遺構検出状況（東から）
堂ノ原城跡遺構完掘状況（東から）
図版７　神戸川堤防跡遠景（南から）
堤防跡東西断面（北から）
図版８　堤防跡石積み状況（北東から）
堤防跡石積み状況（北西から）

第１章　中村横穴墓群の調査

第１節　調査に至る経緯

中村横穴墓は周知の遺跡で、１号横穴墓の１基が確認されていた。平成18年（2006）１月11日、島根県出雲土木建築事務所（現島根県出雲県土整備事務所）による道路建設工事中に、横穴墓が発見されたとの連絡が出雲市文化財課に入った。直ちに文化財課職員が確認に行ったところ、中村１号横穴墓の西側に、２号横穴墓から５号横穴墓の４基を新たに発見した。『平田市遺跡地図』には、中村横穴１基と記載してあり、遺跡の範囲が拡大した。その後、５号横穴墓の西側に横穴墓は存在しないことを確認した。出雲土木建築事務所と協議の結果、５号横穴墓のみを工事施工範囲とするように工事計画を変更し、５号横穴墓の本調査を実施することになった。それに合わせて、１号横穴墓から４号横穴墓も実測調査した。現地調査期間は、平成18年（2006）４月４日～４月18日である。

第２節　位置と環境

中村横穴墓群は、島根県出雲市国富町に所在する。国富町は、島根半島の西部にある旅伏山の東麓に位置する（図１）。旅伏山は、奈良時代に「多夫志烽」が設置された軍事的要衝である。この旅伏山の麓には多くの遺跡が点在し、その中の北東裾の狭い谷部、南斜面に中村横穴墓群は位置する。中村横穴墓群は、旅伏山南東を流れる丹堀川左岸にあり、この川は平田船川（宇加川）と合流し、宍道湖に注いでいる。当横穴墓群は奈良時代に、出雲郡美談郷と呼ばれた地域に位置すると考えられる。

弥生時代中期には、四隅突出型墳丘墓が発見された青木遺跡、緑色片岩製の玉作関連遺物が出土した源代遺跡がある。青木遺跡では、後期にも四隅突出型墳丘墓が確認され、また、近畿式銅鐸の飾耳が島根県で初めて出土した。

古墳時代前期末～中期初頭には、出雲平野初の前方後円墳、大寺１号墳（全長約50ｍ）が青木遺跡の北側に築造される。大寺１号墳の西方に、中期の群集墳と推定される膳棚山古墳群がある。

後期中頃には、直径22ｍの円墳とみられる上島古墳が築造される。埋葬施設は、家形石棺が直葬され、東側に併行して竪穴式石室がある。石棺は、出雲唯一の横口をあけない畿内系の刳抜式であり、中央政権との結びつきが推定できる。

後期後半から末（６世紀後半）には、山根垣古墳、中村１号墳、定岡谷古墳群などに横穴式石室墳が築造される。７世紀になると、出雲東部の石棺石室の要素のある横穴式石室を内蔵する美談神社２号墳、石棺式石室を内蔵する寺山１号墳、八角形墳とされる差指見谷古墳など特徴的な古墳が点在している。同時期には、中村横穴墓群、惣ヶ谷横穴墓群、定岡谷上横穴墓群などの横穴墓群もあるが、詳細は不明である。

奈良時代には中村遺跡、源代遺跡から８世紀代の墨書土器が出土しており、官衙的施設があったと考えられる。また、西西郷廃寺は『出雲国風土記』に記載のある「楯縫郡沼田郷新造院」と考えられる。

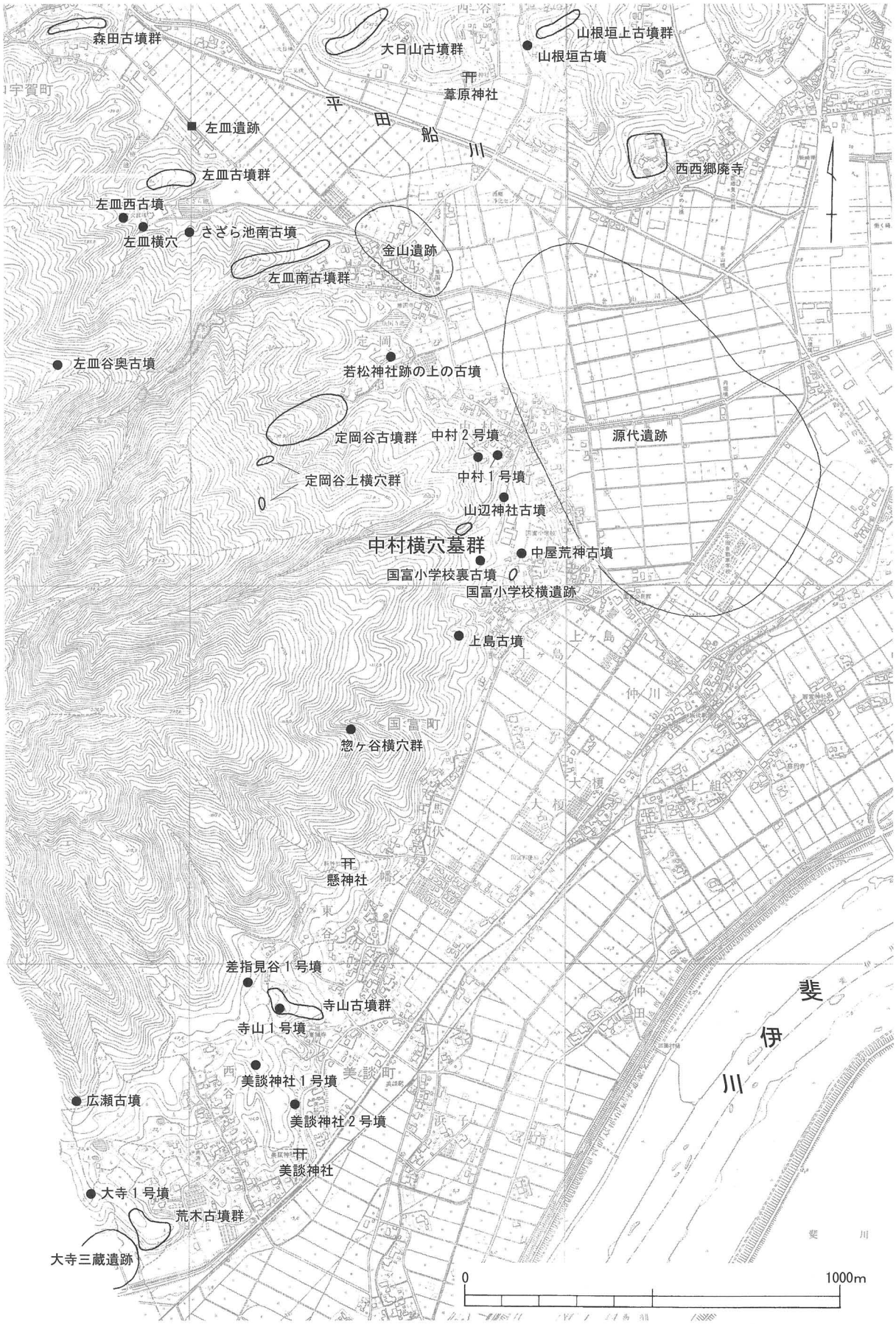


図１　中村横穴墓群と周辺の遺跡（S=1/15,000）

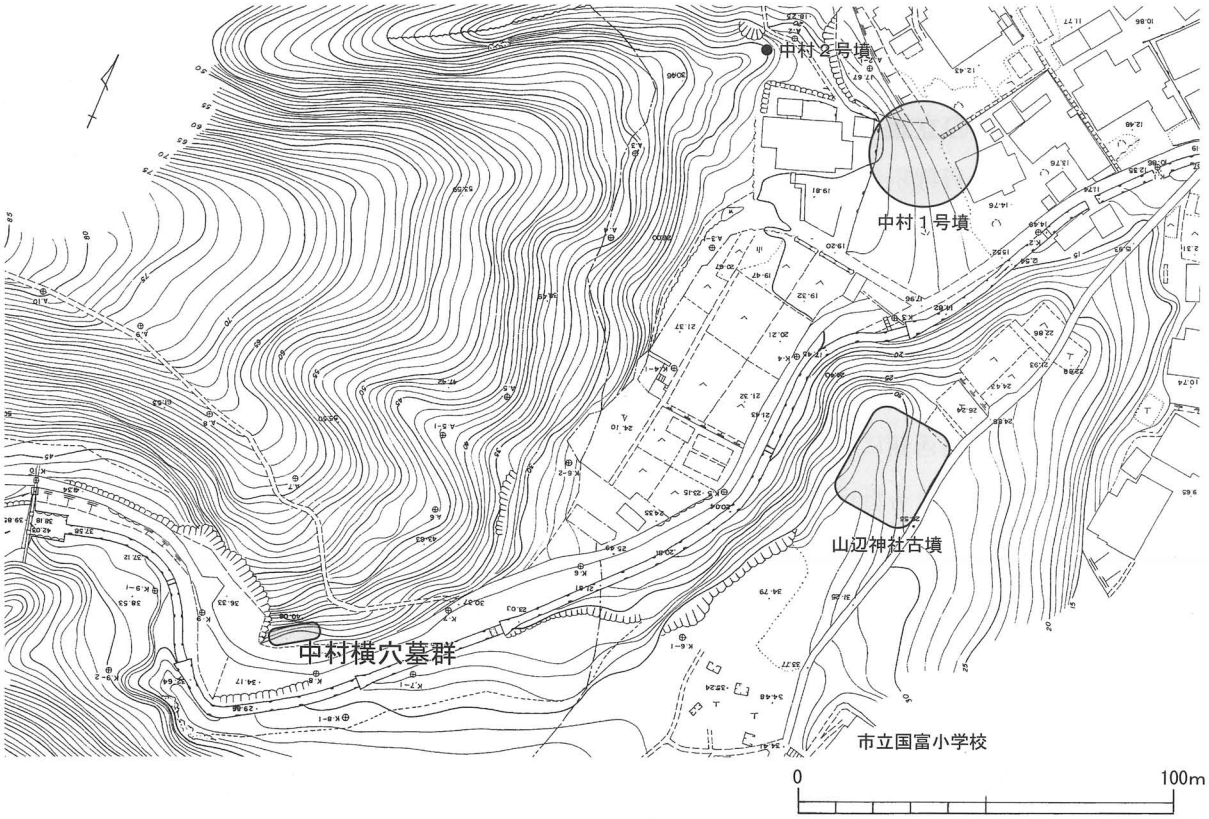


図２　中村横穴墓群周辺地形図（S=1/2,000）

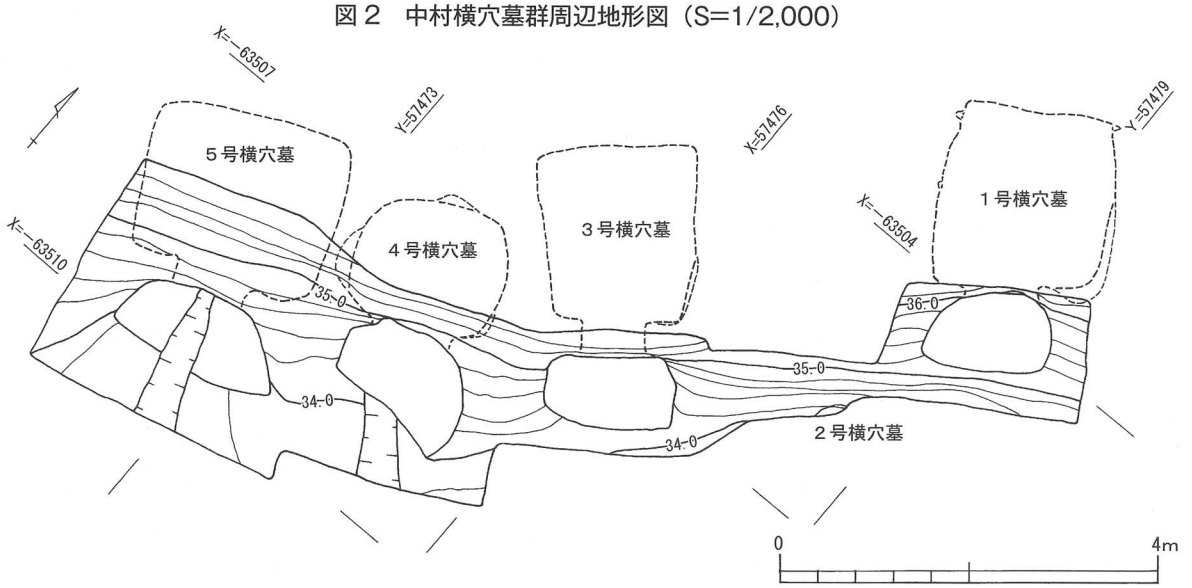


図３　中村横穴墓群平面図（S=1/80）

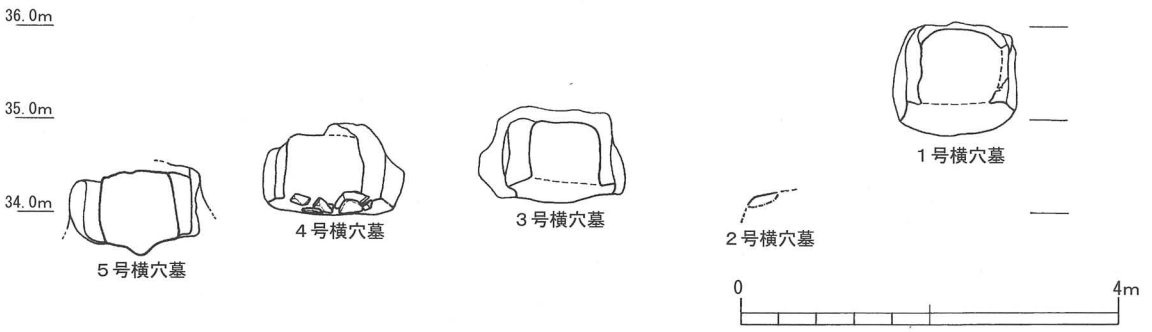


図４　中村横穴墓群立面図（S=1/80）

第３節　調査の成果

１．中村横穴墓群の立地

中村横穴墓群は、丹堀川の上流、左岸側の南東斜面に位置する。東方には近接して、未盗掘墳の中村１号墳、詳細不明の中村２号墳（石室の天井石が露出か）、約 30 ｍの長方形墳の山辺神社古墳がある（図２）。

中村横穴墓群は、１号横穴墓から５号横穴墓の５基が１ｍ間隔で砂岩岩盤に掘削されている（図３）。１号横穴墓は標高 36 ～ 35 ｍの位置に開口していた。玄室内は盗掘され、流土も残っていない状況である。１号横穴墓の南西側に２号横穴墓から５号横穴墓がある。２号横穴墓は標高 34 ｍ付近にあり、中村横穴墓群ではもっとも低い開口位置である。開口部の一部が見えるのみで、遺構の多くは埋没している。３号横穴墓から５号横穴墓は前庭部で開口し、玄室と前庭部は埋没している。３穴とも玄室及び前庭部の流土上面に近世のカワラケが散在しており、近世までには盗掘されていたことがわかる。その後、１号横穴墓以外は埋没し、今回改めて発見されたのである。開口位置は、標高 35 ～ 34 ｍにかけて、３号横穴墓→４号横穴墓→５号横穴墓と標高が下がっている。

２．中村５号横穴墓の調査（図５～図７）

前庭部・玄門部　玄門部は奥行き約 0.4 ｍ、幅約 0.7 ｍ。天井は玄門まで残存している。床面は平らで、床面の中央には、玄室奥壁から前庭部にかけて断面逆台形の排水溝がある。排水溝は、玄室内では幅約 0.4 ｍと広く丁寧に造られ、玄門部で幅 0.15 ｍと狭くなり、前庭部では粗い造りで、幅約 0.5 ｍと再び広がり、深さ約 0.1 ｍを測る。排水溝は、玄室から前庭部へ水が流れる傾斜となっていて、調査区外へ延びる。前庭部は、玄門側が幅約 1.2 ｍ、手前幅約 1.7 ｍ、奥行き約 0.9 ｍを測る。

玄　室　玄室は横長長方形で幅約 2.1 ｍ、奥行き約 1.7 ｍ、高さ約 0.9 ｍを測る。天井は平天井をなす。壁は垂直に近く立ち上がり、天井や側壁には刺突状のノミ痕がよく残る。石棺は無く、自然礫の棺台が排水溝を挟んで左側と右側に置かれている。

棺　台　玄室の左側を棺台１、右側を棺台２とする。棺台１は 0.2 ～ 0.4 ｍの加工痕の無い角礫７つからなり、玄室の左壁と排水溝で区画された範囲の床面上に置かれている。棺台２は、約 0.2 ｍの加工痕の無い角礫６つからなり、玄室右の奥壁側の床面上に置かれている。

閉塞状況　閉塞は、板石が発見されなかったため、木製の板を使用したと考えられる。前庭部には、人頭大の礫が多く、木製の閉塞板を押えていたと考えられる。

土層堆積状況　１～４層は流土で、盗掘坑らしい土層はみられない。したがって、盗掘は流土が入る以前に行われたと考えられる。玄室のほとんどの床面直上には３層が堆積していて、４層は排水溝のみに堆積していた。

遺物出土状況　玄室からは、棺台１の奥壁隅の礫の上から、完形の須恵器杯（図７－１）が出土した。棺台２と右壁との間からは人骨が出土したが、床面からは約３cm 浮いていた。出土層位は３層で、人骨については第４節で詳細を報告する。玄室右側の玄門近くでは、須恵器の杯（図７－２）が床面直上で反転して出土した。前庭部では、閉塞石の隙間に、須恵器片（図７－３・４）があった。

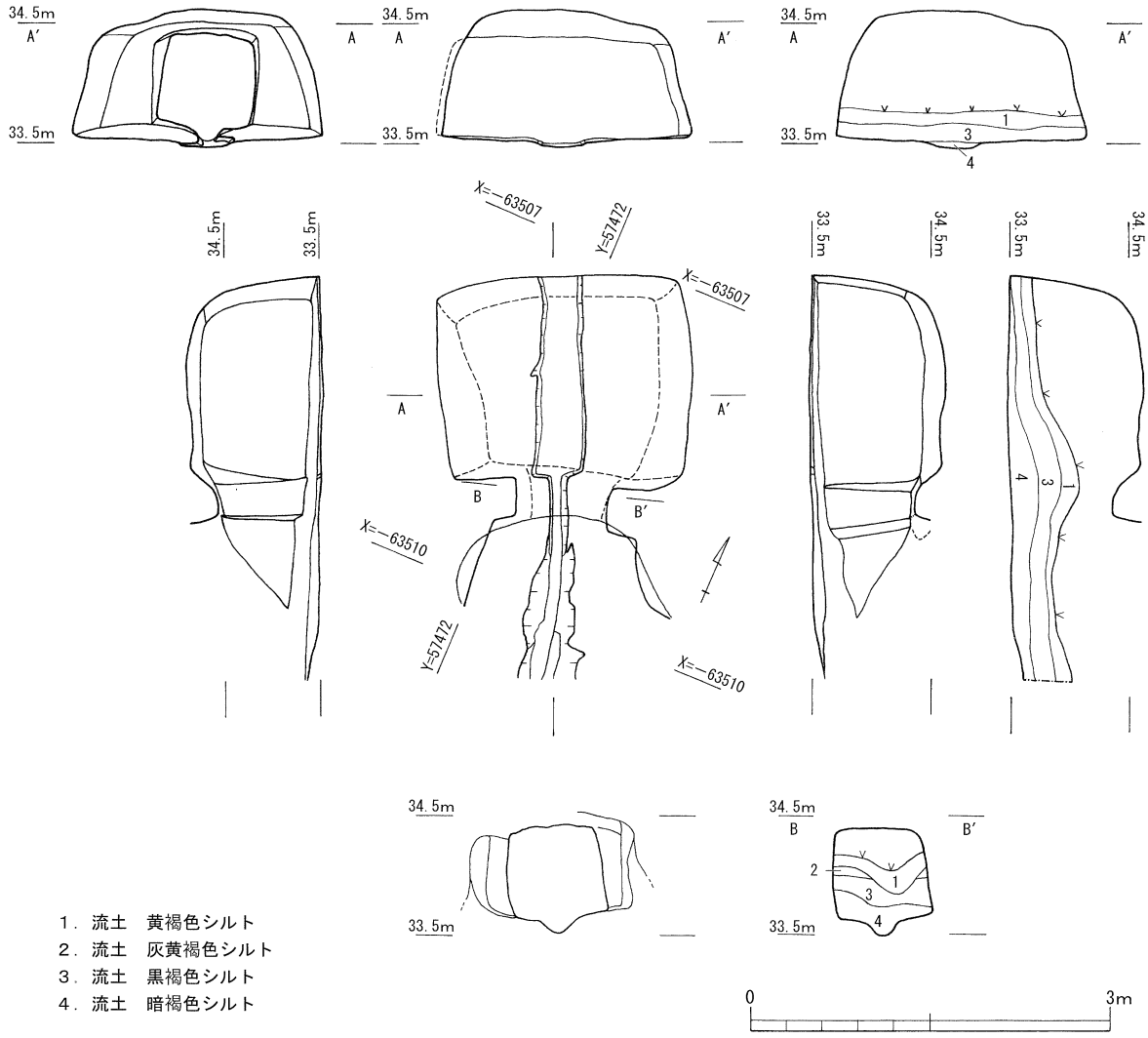


図５　中村５号横穴墓実測図（S=1/60）

出土遺物（図７）　図７の１～４は須恵器である。７－１は完形品の無高台の杯で、口径11cm、器高3.6cmを測る。体部と底部の境が緩やかで、口縁部は内湾して立ち上がり、端部は丸く仕上げられている。底部外面は、回転糸切りが施されている。７－２は完形品の高台付杯で、口径10.4cm、器高3.8cmを測る。体部は直線的に外傾し、端部は先細る。高台は、底部最外周に接合され、ハの字状に開く。高台端部に面取りはされていない。７－３は杯の蓋の破片で、復元口径約14.2cmを測る。つまみの形態は不明である。口縁端部は折り返されて二段に折れる。７－４は皿の口縁部片で底部は欠損している。復元口径約14.6cmを測る。体部は底部から外反して立ち上がり、口縁端部は丸く仕上げられている。７－１～４の時期は、８世紀前半頃と考えられる。

５号横穴墓の時期　５号横穴墓からは、８世紀前半の須恵器が出土した。しかし、出雲地域では８世紀に掘削される横穴墓は未確認で、出土須恵器は追葬に伴うものと考えられる。したがって、５号横穴墓の築造時期を決める遺物は出土していないことになる。そして、出雲の横穴墓は、６世紀末以降に出現することから、５号横穴墓は６世紀末～７世紀にかけての築造と推定できよう。

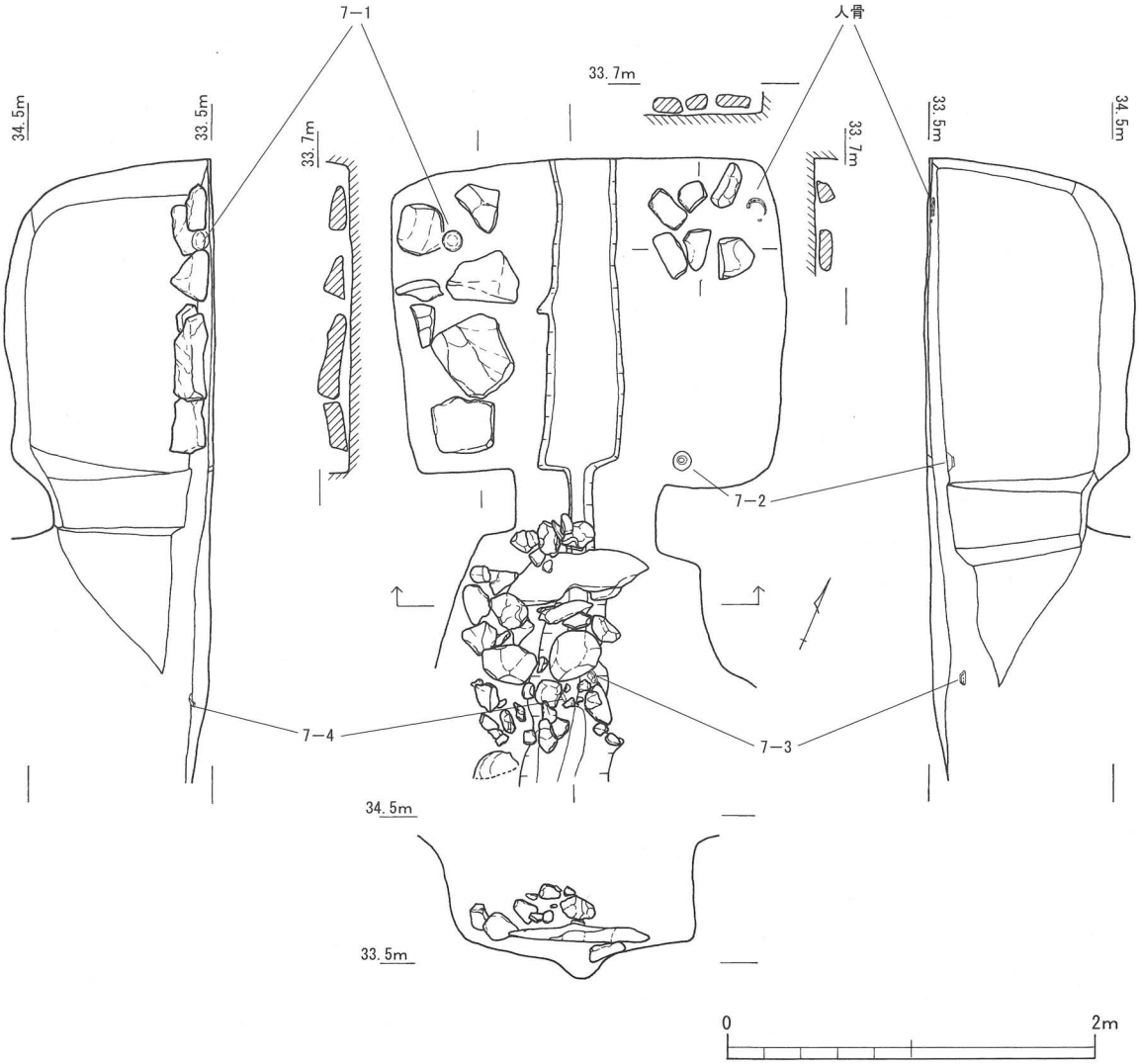


図６　中村５号横穴墓遺物出土状況（S=1/40）

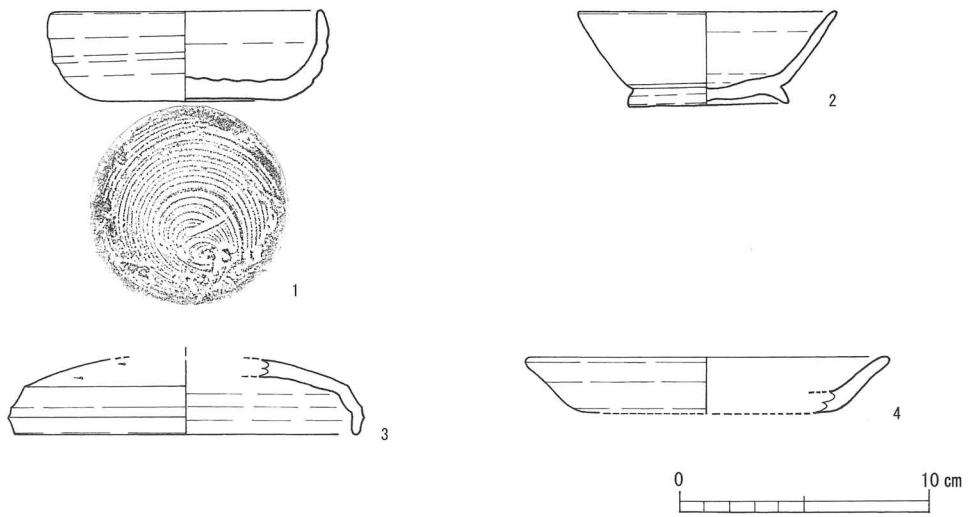


図７　中村５号横穴墓出土遺物実測図（S=1/3）

第４節　分　析

中村５号横穴墓から検出された人骨について

鳥取大学医学部形態解析学分野
井上貴央

１．はじめに

出雲市国富町に位置する中村横穴墓群５号横穴墓から人骨が出土した。８世紀代のものと考えられる須恵器が副葬品として検出されているが、この地域では８世紀に築造される横穴墓がないことから、副葬品は追葬によるものと考えられている。人骨から得られた所見は少ないが、本稿ではその概略を報告する。

２．人骨の検出状況

筆者自身、骨の検出状況を見ているわけではなく、人骨は発掘調査終了後に筆者のもとにもたらされたものである。人骨の出土量は極めて少なく、骨の検出状況を示す写真から、この横穴の調査時の様子をほぼ理解することができた。

玄室内には棺台が認められ、その間から人骨が出土したとのことである。玄室には玄門から土砂が流入しており、その土層は４層に区別されている。人骨が含まれていたのは第３層であり、床面からは３cm 上方から検出されたことになる。人骨の検出された位置は、玄門から見て玄室の右奥である。また、玄室内の流土上から近世のカワラケが出土したとのことである。

前庭部からは、砂岩でできた閉塞石が検出されているが、玄室が閉塞された状態ではなく、無秩序に前庭部から検出されている。従って、玄室がある時期以降は開口していたものと考えられる。

３．検出された人骨

写真に記録されていた人骨は下顎骨と第３大臼歯のみであり、そのほかにも検出位置は不明であるが、骨片と歯牙片が見つかっている。

第３大臼歯は、写真で認められた下顎には定植しておらず、下顎から数 cm 玄門側に離れた場所から検出されている。しかし、実際の骨と歯を観察すると、これらは同一個体のものであり、土砂の流入や人為的な要因によって、定植していた歯牙が遊離したものと考えられる。

写真から判断するとこの下顎骨は、歯槽を上面に向けて出土していたようである。下顎骨は主に右半分が残存しており、重厚である。第１大臼歯に相当する歯槽は、吸収閉鎖をきたしている。第２大臼歯は、発掘時に歯冠の部分が欠損したようで、歯根のみ残存しており、その断面は新しい。第３大臼歯の歯冠の咬合面を見ると、わずかに咬耗が認められ、その程度は Martin の１～２度である。小臼歯に相当する歯槽は、破損のため確言できないが、歯槽が閉鎖しいていた可能性が高い。歯式は以下の通りである。

M_3 M_2 閉 脱

本下顎骨の性別は、その形態学的特徴から判断して男性と考えられ、年齢は歯の咬耗の程度から判断して、壮年と考えられる。

そのほかに、出土位置は不明であるが、玄室の床面の土砂の第３層の土を篩ったものから、厚くて頑丈な大腿骨片などの骨片や歯牙片が検出されている。大腿骨片は成人男性のものであり、下顎骨と同一人物の可能性がある。しかし、歯牙片の中には咬耗がまったく認められず、骨内に埋伏していたと考えられる若年者のものも検出されている。この歯牙片については、性別を特定できない。

４．最後に

本横穴には、２体の埋葬があったことが推定される。１体は壮年男性であり、もう１体は詳細な年齢は特定しがたいが、若年者である。

稿を終わるにあたり、本人骨の検討の機会を与えていただいた関係各位、とりわけ人骨の出土状況などについてご教示いただいた出雲市文化観光部文化財課の坂本豊治主事に感謝申し上げる。

第５節　まとめ

１．中村横穴墓群の位置

出雲市の北東部（合併前は旧平田市）には、多くの中小の古墳や横穴墓が点在している。しかし、そのほとんどが未調査で、各遺跡の詳細は不明である。とはいえ、中村１号墳、美談神社２号墳、山根垣古墳、上石堂平古墳など石室墳の調査は行われ、詳細な報告も行われてきている。特に、中村１号墳では石室が出雲西部、家形石棺が出雲東部の特徴を備えていることや、出雲東部の特徴である石棺式石室が寺山古墳で採用されていることなどが注目される。当地域の特徴は、出雲西部でありながら、出雲東部勢力との関係も強くもつことであり、そのことは石室墳からわかってきている。横穴墓は、国富町には中村横穴墓群・惣ヶ谷横穴墓群・定岡谷上横穴墓群・左皿横穴、本庄町には西谷横穴・水谷横穴群・奥宇賀町岩屋谷横穴群・光屋谷横穴、久多美町には西谷横穴群、鹿園寺町には一宝寺横穴群、野郷町には三の谷下横穴群・君谷横穴など12遺跡が遺跡地図に掲載されている。これらの横穴墓の中で、測量図が公表されているのは、一宝寺１号・２号穴、惣ヶ谷１号穴のみである。今回の中村横穴墓群の調査は、当地域初の発掘調査となった。重要な研究課題の一つに、当地域の横穴墓が石室墳と同じように、出雲東部の特徴を持つ地域なのか、否か、独自性があるのかがあげられる。

２．中村５号横穴墓の評価

中村５号横穴墓は、６世紀末～７世紀に掘削され、８世紀前半に追葬が行われた。その後、土砂が流入する前に盗掘されたと考えられる。

玄室は平面形が横長の長方形で、壁は垂直気味に立ち上がり、天井は平天井をなし、軒線、棟線などは無い。平面形が横長になるタイプは、出雲西部には少なく、出雲東部に多くみられるものである。壁が垂直気味に立ち上がる特徴は、出雲西部に多い。平天井は、出雲地域では珍しいタイプであるが、掘削途中の段階とも考えられる。これらの形態的特徴からは、系譜が出雲東部、西部とも判断できない。前庭部から玄室奥にかけて直線的な排水溝があり、その左右に棺台状の礫が置かれている。明らかに屍床を意識した空間利用である。排水溝が玄門部で狭く、玄室内で広くなる形態は一宝寺２号穴と同じである。また、出雲西部では、板状に加工した石床が一般的であり、５号横穴墓の棺台の状況とは異なる。これらの棺台付近では、２体の埋葬があったことが推定される。１体は壮年男性であり、もう１体は詳細な年齢は特定しがたいが、若年者であることがわかる。閉塞は、木板で行われたと推定され、木板の押さえの礫が前庭部で検出されている。

３．中村１号横穴墓～４号横穴墓

５号横穴墓の東側には１号横穴墓から４号横穴墓が開口している。５号横穴墓の調査に合せて流土が堆積していない１号横穴墓の測量を実施した（図８）。１号横穴墓は、平面形が縦長の長方形で、天井は丸天井をなす。壁の崩落がみられ、特に玄門部の破損が激しい。遺物の出土は無く、形態も一般的なもので、時期の限定は難しい。２号横穴墓は開口部の一部が見えるのみで、詳細は不明である。３号横穴墓は平面が縦長長方形で、天井は丸天井をなす。４号横穴墓は平面が横長楕円形で、天井は丸天井をなす。玄室の面積が狭く、未完成の横穴墓であろう。

既に測量図が報告されている、国富町の惣ヶ谷１号横穴墓は玄室の平面が横長長方形で、天井は丸天井をなす。鹿園寺町の一宝寺１号横穴墓は平面が正方形で、天井が妻入り正整家形、一宝寺２号横穴墓は平面が正方形で、天井が丸天井をなす。現状では、中村横穴墓と併せて、５基の横穴墓が記録されたことになる。しかし、これだけでは、当地域を評価することは難しい状況である。当地域の横穴墓調査の類例が増えることを期待し、再度検討してみたい。

４．中村横穴墓群と中村１号墳

中村横穴墓群の北東約 200 mに、未盗掘の横穴式石室を内蔵する中村１号墳がある。６世紀末築造の直径約 30 mの円墳で、石室長が約 10 mある出雲地域では大形の横穴式石室である。また、副葬品も多彩で、３振りの装飾大刀や３組の馬具などが出土している。これらの内容から、中村１号墳は、出雲市上塩冶町の上塩冶築山古墳の下位に位置する、出雲西部№２クラスの古墳と考えられる。この中村１号墳の被葬者と中村横穴墓群の被葬者は同時代に生きていた可能性は十分推定できるだろう。実際にどのような関係であったかは、推定の域を脱しないが、当地域の古墳時代後期後半～終末（６世紀後半～７世紀）にかけて、彼らが重要な役割りを果たしていことは間違いないであろう。今後、当地域の横穴墓調査や中村１号墳の研究を進めることで、出雲地域の古墳時代の人たちの生活により迫れると考えている。そして、当地域は出雲東部、西部の両勢力の関係や、その後の出雲国の成立を解明する上で重要な地域となるであろう。

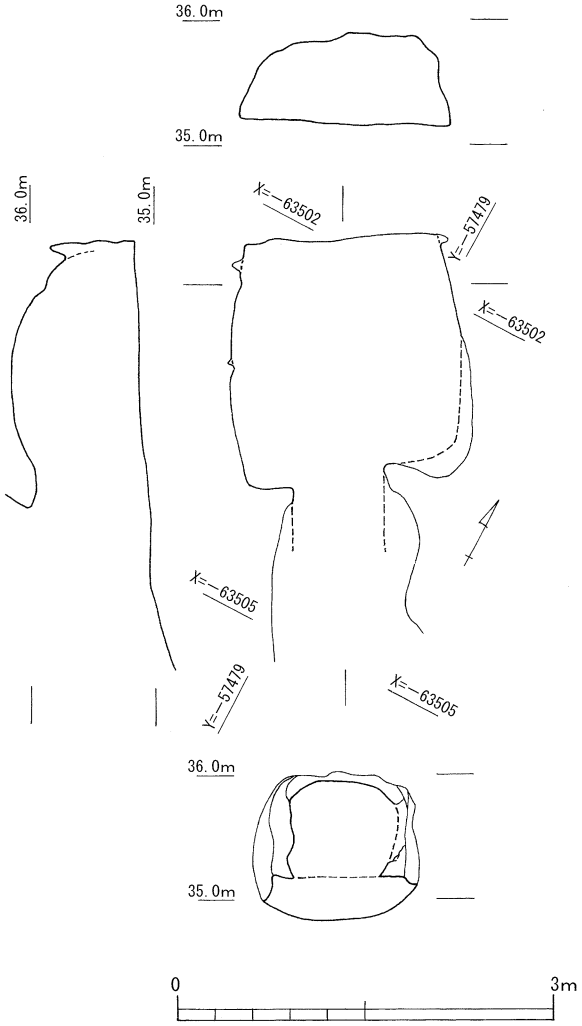


図８　中村１号横穴墓実測図（S=1/60）

【参考文献】
大谷晃二・松山智弘 1999「横穴墓の形式とその評価」『田中義昭先生退官記念文集―地域に根ざして―』田中義昭先生退官記念事業会山陰横穴墓研究会編 1997『出雲の横穴墓―その型式・変遷・地域性―』第７回山陰横穴墓調査検討会
島根県教育委員会編 1998『上沢Ⅱ遺跡　狐廻谷古墳　大井谷城跡　上塩冶横穴墓群（第７・12・22・23・33・35・36・37 支群）』斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ
花谷浩 2008『出雲における県（あがた）の歴史考古学的研究』課題番号 19904024 平成 19 年度科学研究費補助金（奨励研究）成果報告書
平田市教育委員会編 2004『中村１号墳』平田市埋蔵文化財調査報告書第 12 集
平田市教育委員会編 1993『平田市遺跡地図』平田市埋蔵文化財調査報告書第３集

第2章　堂ノ原城の調査

第１節　調査に至る経緯

平成18年１月25日に、ＫＤＤＩ株式会社より出雲河下携帯電話基地局建設予定地における埋蔵文化財の有無について出雲市文化財課に照会があった。これを受けて現地踏査を行い、当該建設予定地が周知の遺跡である堂ノ原城跡の範囲内にあることを確認した。その後ＫＤＤＩ株式会社と再度協議を行った結果、発掘調査の依頼を受け、平成18年４月26日から平成18年５月26日まで調査を行った。

第２節　位置と環境

今回の発掘調査の対象となった堂ノ原城跡は、出雲市河下町字堂ノ原地内の標高約166ｍの山頂中心に拡がる中世城郭の遺跡である。堂ノ原城は戦国時代に蔦江忠兵衛が城主で、東側谷あいの布施地区には乗馬の稽古場があったと伝えられているが、文献史料が乏しく詳細は不明である。堂ノ原城跡

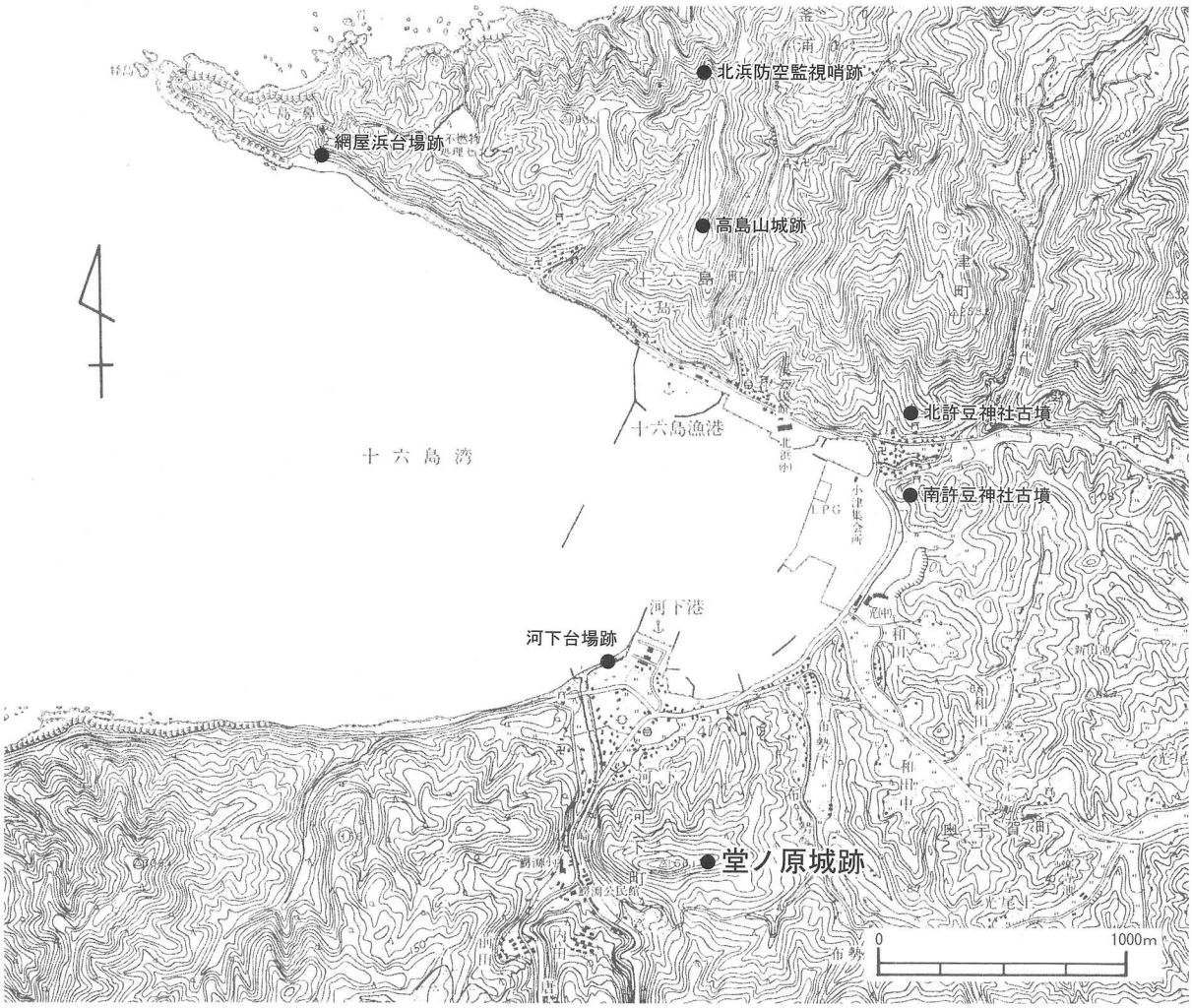


図９　十六島湾周辺の遺跡（S＝1/30,000）

が立地する山は東西方向に尾根が延びており、西の山裾には唐川川、東の山裾には布施川が流れる。山頂からは北方向にこれらの川が流れ込む十六島湾を望むことができる。堂ノ原城跡から十六島湾を望むとその眼下には、唐川川の扇状地の端部に幕末期築造の河下台場跡がある。十六島湾周辺の遺跡は、縄文時代・弥生時代の遺跡は知られておらず、古墳時代以降のものばかりである。古墳時代の遺跡としては、堂ノ原城跡の北東約２kmの小津町には南許豆神社古墳、北許豆神社古墳などが知られている。さらに対岸の十六島町には中世城郭の高島山城跡、江戸時代後期の網屋浜台場跡、第二次大戦中の監視施設である北浜防空監視哨跡などがある。

第３節　調査の概要

今回の調査地は、山頂から 70 m東方の尾根上の緩やかな斜面地で、林道堂ノ原線の終点に隣接する位置にある。

平成 12 年５月にＮＴＴドコモ無線基地局新設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査を、旧平田市教育委員会が山頂付近の南側平坦地で実施した。この時、曲輪が確認された（図 11）。

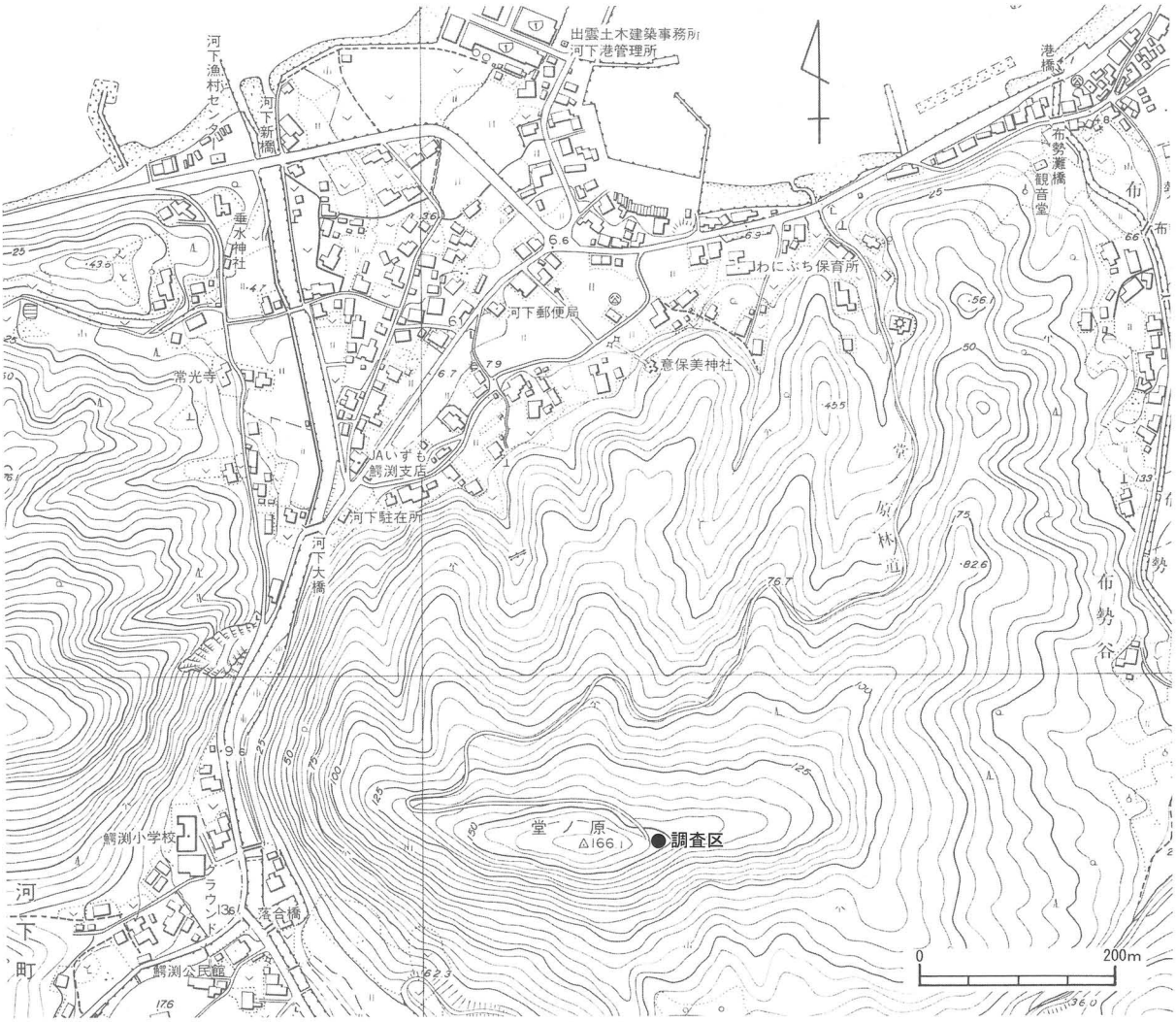


図 10　堂ノ原城跡調査区位置図（S=1/7,500）

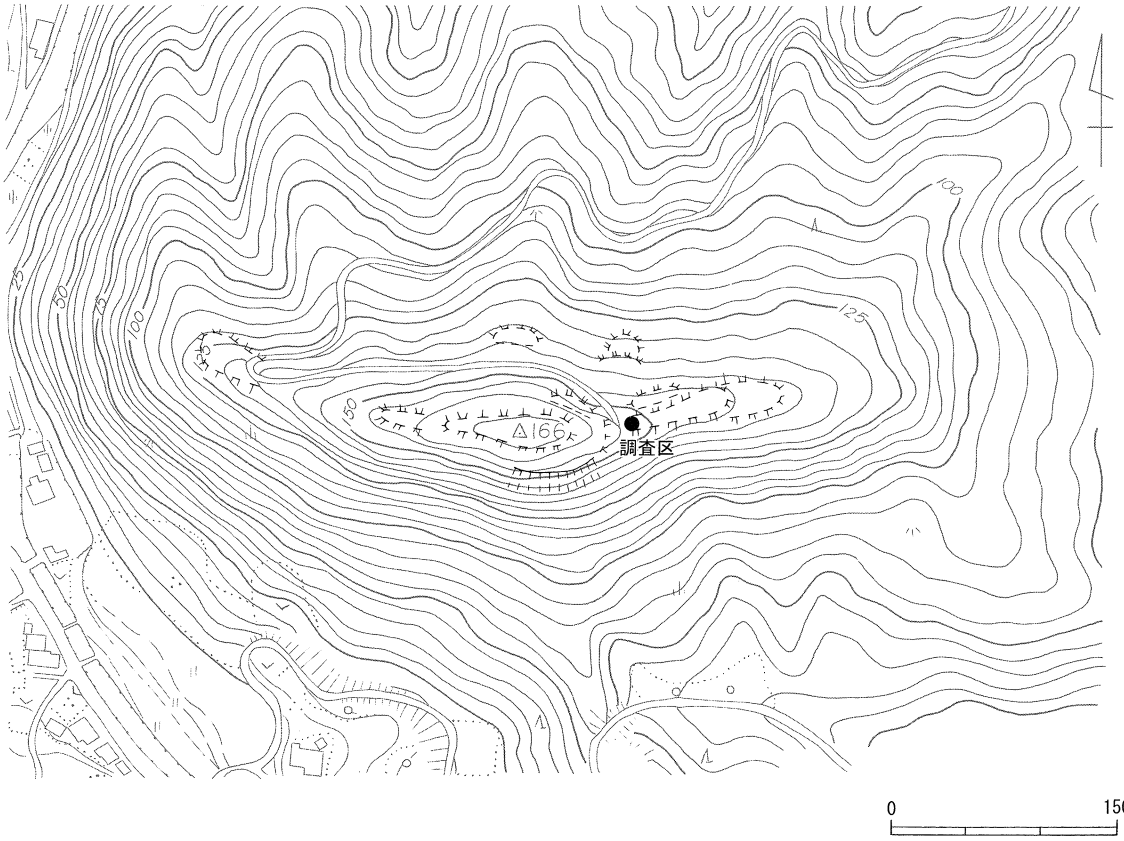


図 11　堂ノ原城跡縄張図（S=1/5,000）

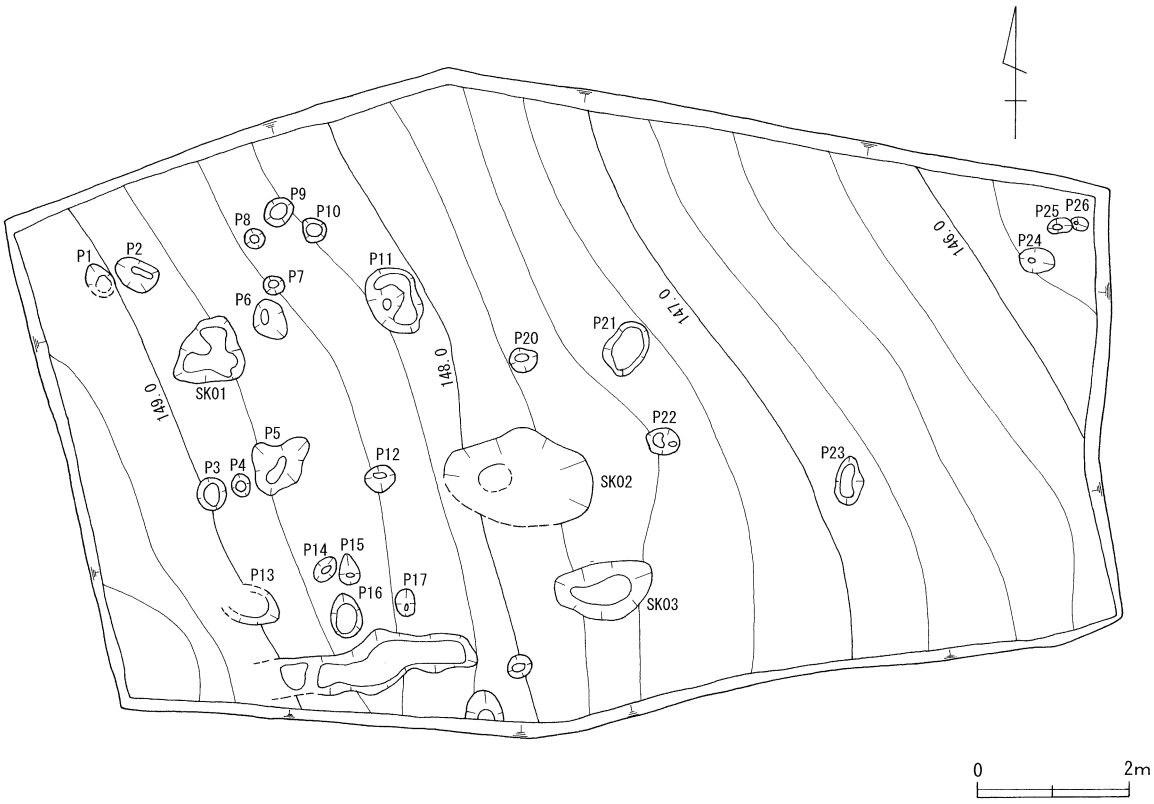


図 12　堂ノ原城跡遺構平面図（S=1/100）

今回の調査区は、曲輪東部の一部にあたる。調査面積は150㎡である。

最初に30cmの表土を取り除き、その下から黄褐色の地山を検出した。この地山面に掘り込まれた土坑、ピット、溝状の遺構を検出したが、遺物の出土はなかった。

土坑は３基ある。直径は90～200cm、深さ30～40cmある。特にＳＫ０２は炭化物が厚さ15cm程度堆積していた。しかし、土坑の壁面に焼けたような痕跡が見られないので、一時的に火を焚いて埋めたものと考えられる。

ピットは26基検出。径が20～50cm、深さ20～40cmある。

溝状遺構は１条。長さ２ｍ、幅70cmまで確認でき、次第に消滅している様子が認められた。

第４節　まとめ

今回の調査では遺物が出土しなかったため、検出した遺構の年代を特定することはできなかった。しかし調査範囲が堂ノ原城跡の縄張りの中にあることから、これらの遺構が柵のような付属施設の一部である可能性は高いと考えられる。

また、城の曲輪平坦面が北の海側（十六島湾）を向いて配置されており、対岸の高島山城とともに海上からの船の侵入を見張っていた可能性はある。城の構造や機能性について明らかにするために、今後の周辺の分布調査、文献史料調査などに期待するものである。

【参考文献】
平田市老人のための明るいまち推進協議会編 1979『ひらたのむかし話』
平田市教育委員会編 1993『平田市遺跡地図』平田市埋蔵文化財調査報告書第３集
平田市教育委員会編 2000『堂ノ原城』平田市埋蔵文化財調査報告書第７集

第３章　神戸川堤防跡調査

第１節　調査の経緯

平成 20 年（2008）10 月 27 日、出雲市所原町地内の河川改修工事中に堤防状の構造物を発見したと島根県出雲県土整備事務所から出雲市文化財課に連絡があった。これを受けて同日現地確認を行うとともに、平成 20 年（2008）10 月 29 日から２日間を要して概略の実測と写真撮影を行った。

第２節　調査の概要

堤防状の構造物は、神戸川上流の出雲市所原町地内に位置し、河川の左岸を掘削中に発見された。神戸川は、標高 200 m前後の山に囲まれた谷筋を南から北へ流れており、この構造物が確認された場所は、川が一旦東へ向きを変え、再度北に流れを変える地点である（図 13・図 14）。

河岸の土砂を表土から２m程掘り下げた際に発見され、残存する長さは約 35 m、幅は下端約６m、上端 3.3 mである。根石が埋まっている旧地盤からの高さは約 1.6 m、方位は長軸がほぼ北に向いている（図 15）。

構造物は側面を石積みしたもので、根石を約６m 離して南北方向に２列並べ、その間に握りこぶし大から人頭大の河原石を詰め込み、断面台形状に構築している（図 18・図版７）。

川側（東面）は 0.5m ～ 1.0m 程の大きさの石が使用され、意図的に個々の石の面をそろえているこ

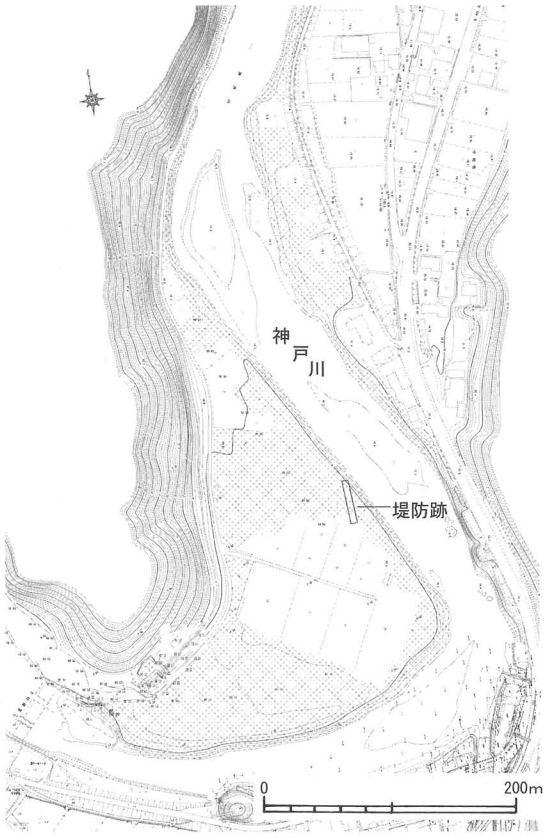


図 13　神戸川堤防跡位置図（S=1/800,000）（上）

図 14　堤防跡の位置と周辺地形図（S=1/6,000）（右）

とが分かる。根石の脇には石を支えるために打ち込まれた杭が残っていた。また、残存状況からすると、石は４段に積まれていたと考えられる。川側の石積みの角度は、地盤から0.8mの高さまではほぼ垂直、その上は約70度である。

丘側（西面）は長さ1.0mを超える石が根石として使用され、その上に石が４段積まれている。この根石をあわせると丘側の石は５段積みとなる。根石は長方形の石が使用されており、長軸を川の流れと直交させる向き（東西方向）で配置している。石積みの角度は約40度で、川側に比べると緩やかな角度となっている（図18・図版７・８）。

第３節　まとめ

調査の結果、この構造物は、時期は不明であるが神戸川の治水対策として設置された堤防跡である可能性が高いと考えられ、今後、文献調査や神戸川流域での文化財調査が行われた際には総合的に検討していく必要がある。

今回の調査では、図面及び写真を部分的に記録するに留まったが、神戸川の治水対策の歴史を知るうえで貴重な資料である。

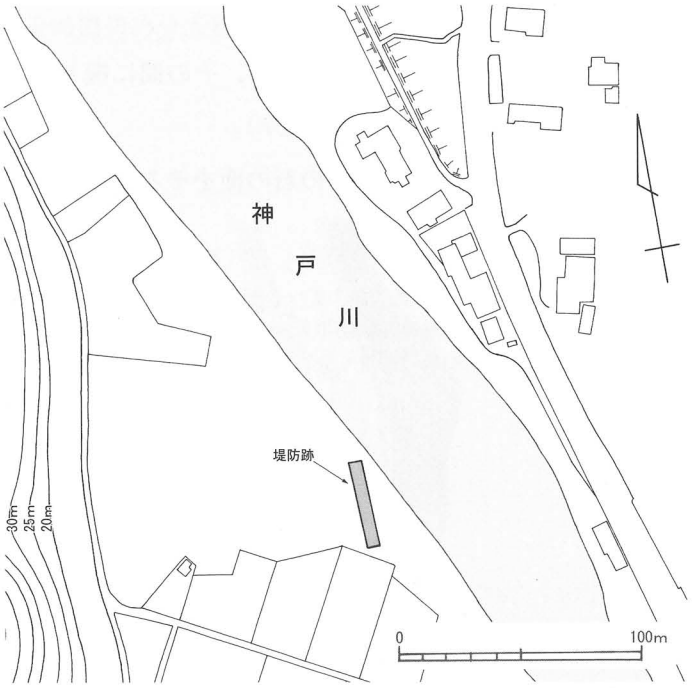


図15　堤防跡位置図（S=1/3,000）

図16　堤防跡（北東から）

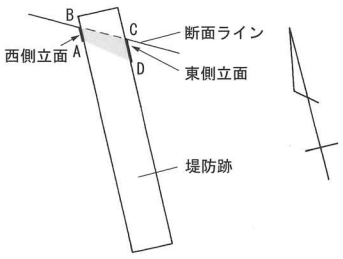


図17　堤防跡模式図

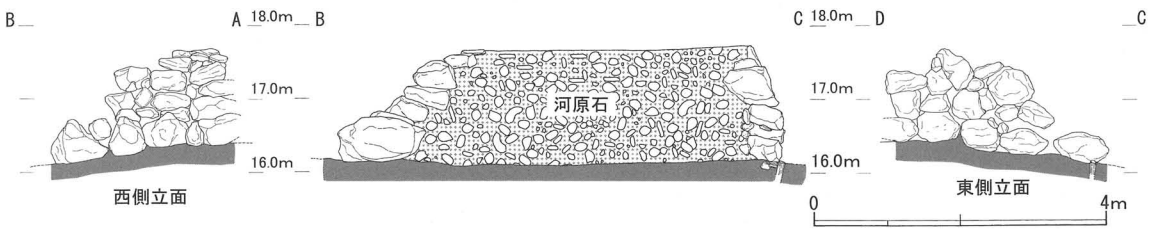
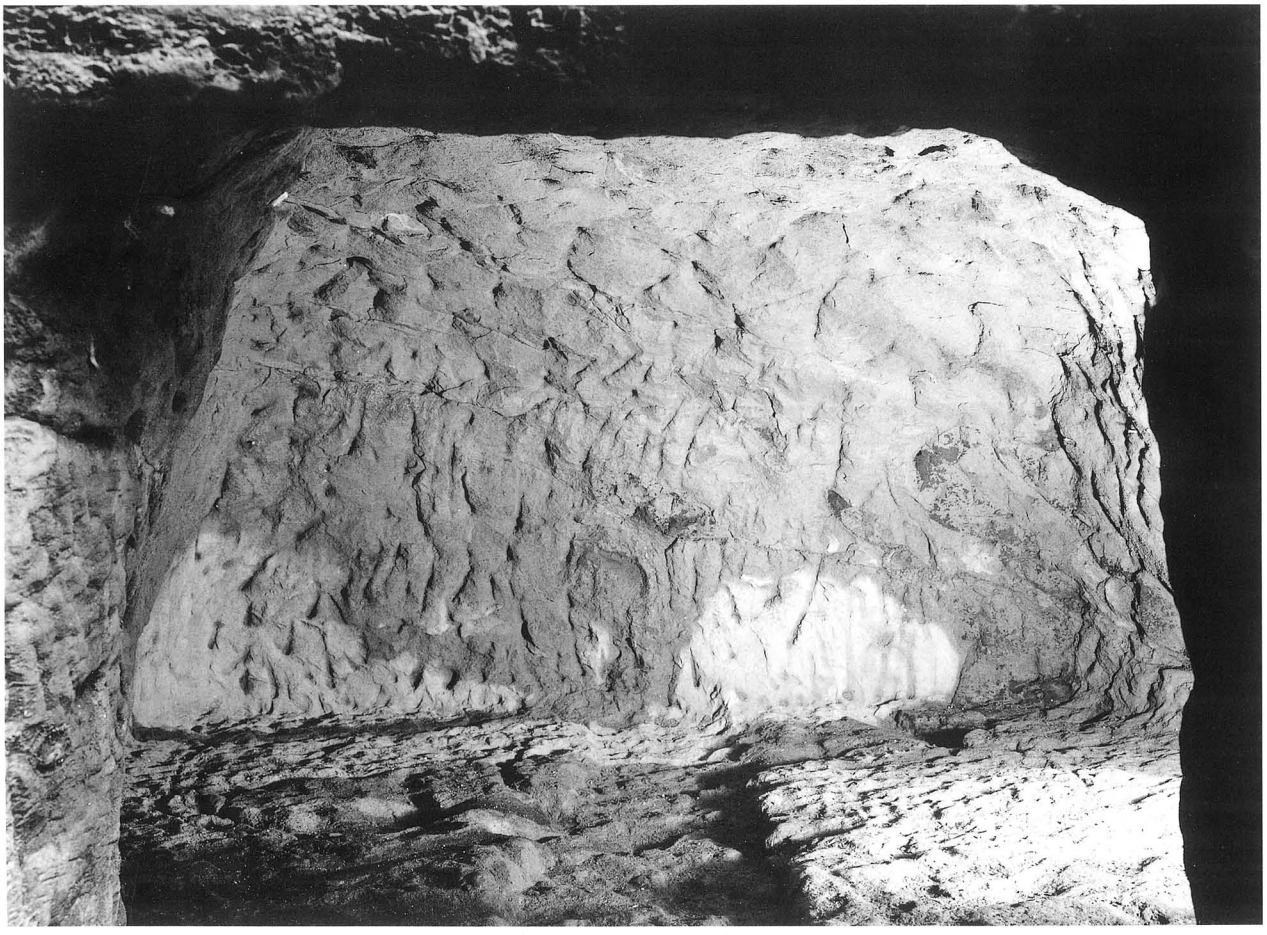


図18　堤防跡実測図（S=1：100）

図　版

中村横穴墓群全景（南東から）

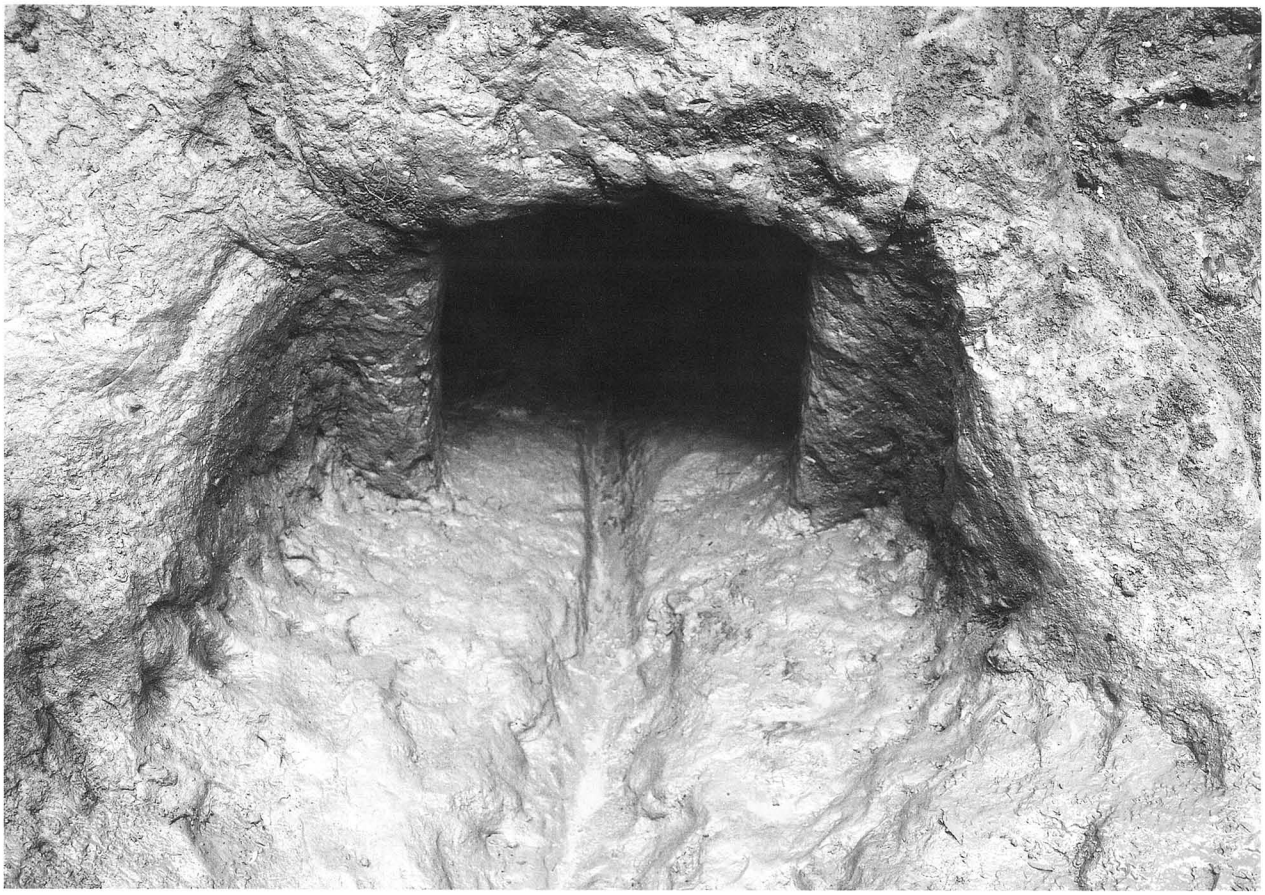


中村５号横穴墓玄室完堀状況

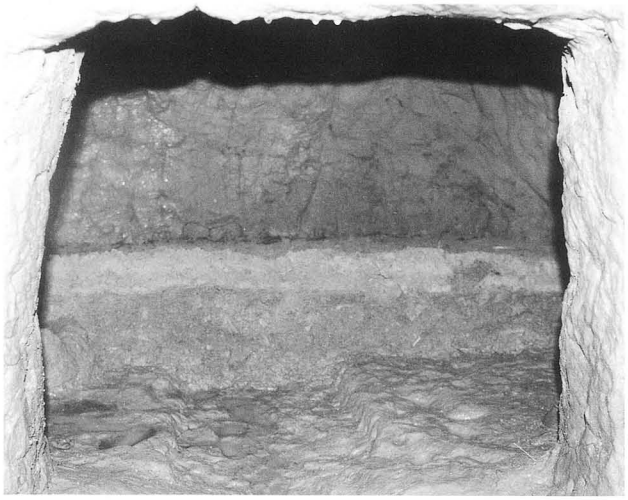
図版２

中村５号横穴墓閉塞状況

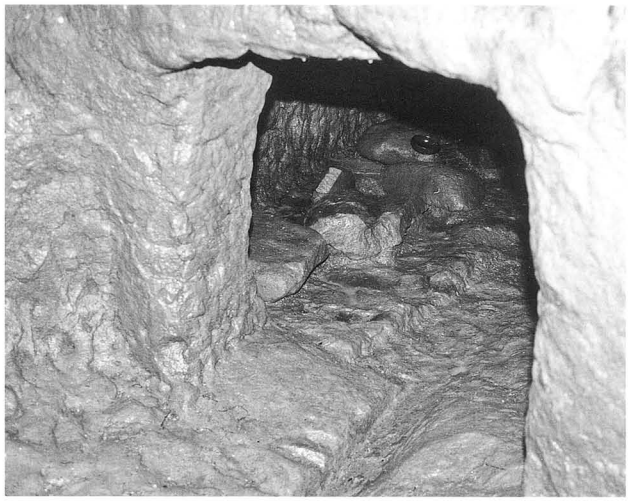
中村４号横穴墓閉塞状況



中村５号横穴墓前庭部完掘状況

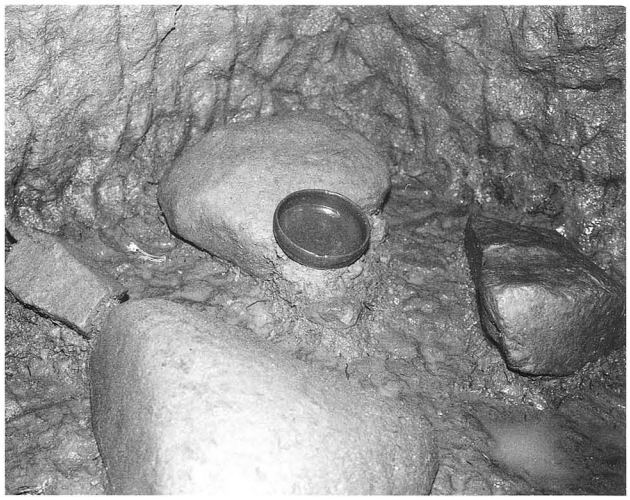


中村５号横穴墓玄室流土堆積状況



中村５号横穴墓玄門調査状況

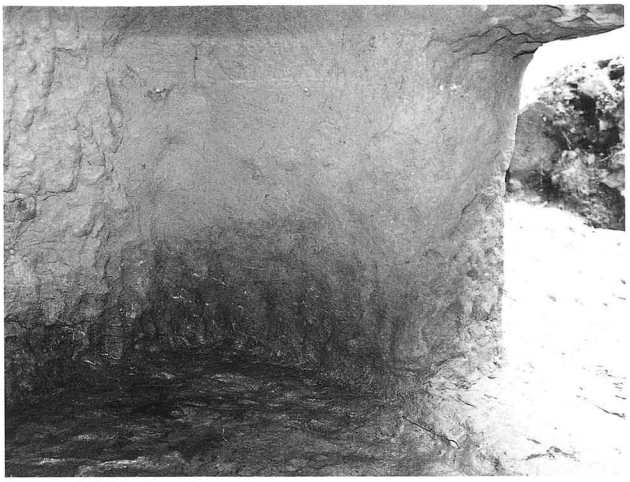
中村５号横穴墓棺台１



中村５号横穴墓玄室内須恵器出土状況１

図版４

中村５号横穴墓玄室内須恵器出土状況２



中村５号横穴墓右側玄門（玄室内から）

中村５号横穴墓玄室内人骨出土状況

中村５号横穴墓玄門（玄室内から）

7－1

7－３

7－2

7－4

人 骨

中村５号横穴墓出土遺物

堂ノ原城跡遠景（北から）

堂ノ原城跡調査区近景（東から）

図版６

堂ノ原城跡遺構検出状況（東から）

堂ノ原城跡遺構完掘状況（東から）

神戸川堤防跡遠景（南から）

堤防跡東西断面（北から）

図版８

堤防跡石積み状況（北東から）

堤防跡石積み状況（北西から）

報告書抄録

ふりがな	へいせいにじゅうねんどいずもしのぶんかざいほうこく
書名	平成20年度 出雲市の文化財報告
副書名	中村横穴墓群・堂ノ原城跡・神戸川堤防跡
巻次	
シリーズ名	出雲市の文化財報告
シリーズ番号	7
編集者名	坂本　豊治
編集機関	出雲市文化企画部文化財課
所在地	〒693-8531　島根県出雲市今市町70　TEL 0853-21-6893
発行年月日	平成21年(2009)　3月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
なかむらおうけつぼぐん 中村横穴墓群	しまねけん 島根県 いずもし 出雲市 くにとみちょう 国富町	32403	×27 (島根県遺跡地図I)	35° 25′37″	132° 48′01″	2006年 4月4日 ～ 2006年 4月18日	40㎡	丹堀川通常砂防事業
どうはらじょうあと 堂ノ原城跡	しまねけん 島根県 いずもし 出雲市 かわしもちょう 河下町	32403	×174 (島根県遺跡地図I)	35° 26′30″	132° 45′02″	2006年 4月26日 ～ 2006年 5月26日	150㎡	携帯電話基地局新設工事
かんどがわていぼうあと 神戸川堤防跡	しまねけん 島根県 いずもし 出雲市 ところばらちょう 所原町	32403	—	35° 18′12″	132° 45′42″	2008年 10月29日 ～ 2008年 10月30日	210㎡	神戸川広域基幹河川改修工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
中村横穴墓群	横穴墓	古墳時代	横穴墓	なし	中村横穴墓群は5基の横穴墓からなる。その内、5号横穴墓の発掘調査を実施。2体の人骨と8世紀代の須恵器が出土した。
堂ノ原城跡	城跡	中世	郭	なし	中世城郭の付属建物遺構。出土遺物はない。
神戸川堤防跡	堤防	不明	堤防	なし	時期不明だが神戸川内に残る残存長35mの石積み堤防。 出土遺物はない。

出雲市の文化財報告　7

平成20年度　出雲市文化財調査報告書

中村横穴墓群・堂ノ原城跡・神戸川堤防跡

平成21年（2009）3月31日

編集　出雲市 文化企画部 文化財課
出雲市今市町70

発行　出雲市教育委員会
出雲市今市町70

印刷　西村印刷
出雲市難分町503-2